

0. はじめに

日本で新型コロナウイルス感染症が確認されてから 2 年。同窓会員の皆様におかれましては、気苦労が絶えない日々をお過ごしのことと拝察いたします。コロナ第 6 波に対する注意喚起が盛んですが、会報が発行される 2 月末の状況が懸念されます。

同窓会の皆様にはまずお礼を申し上げなければなりません。2021 年度、ここまで対面授業が継続されてきました。例年 11 月に高校 1・2 年生と希望する附属中生徒向けに職業人による進路講演会を実施しております。今年度から同窓会よりご支援をいただくことになりました。どうもありがとうございます。これによって、講師の人選が多様になりました。生徒には内容の濃い、インパクトを与える話を聴かせたいと考えております。今年度は(株)ISA シンガポール代表の齋藤貴臣様に「KNOWING－DOING－BEING～より良い未来を創出するために～」というタイトルで話していただきました。詳細は進路部 HP をご覧ください。

1. 昨春入試 (2021 年度入試)について

いつもの会報では合格結果に触れるだけなのですが、2021 年度は入試の転換点だったので、詳細に記します。創立 80 周年あるいは 100 周年を迎えるとき、過去の振り返りにご活用いただければ幸いです。

この学年の生徒たちは、高校入学時から様々な入試改革を予告されていきました。大学入試センター試験から大学入学共通テスト(以下共通テスト)への変更、共通テストにおける国語・数学①での記述式問題の導入と英語外部検定試験の利用、さらには主体性評価に資する Japan e-Portfolio(高校生活全般について生徒が記録を残すための仕組み、以後 JeP)の導入、大きくはこの 3 つです。共通テストへの衣替えにあたっては 2 回の試行調査が行われ、センター試験と比べてかなり趣の異なる問題が出題され、我々職員は頭を抱えました。高校生活の記録については、1 年時より取得した資格やボランティアを含む校外活動、大学での公開講座等の記録を残すように、担任がこまめに指導しました。英語外部検定試験に対しては、進路部が情報収集に奔走し、担任団や英語科と相談の上、ケンブリッジ英検(紙媒体)の A2Key を受検する方針を 2 年時の 9 月下旬に決定し、生徒に説明しました。他校では英語科案件として扱われていたようですが、本校では進路部案件として戦略を練り、校長と進路部長連名の保護者通知も作成しました。ところが、配布予定日の朝、導入延期の報道が流れ(配布は急遽中止)、翌 12 月、記述式問題の導入延期も発表されました。更に JeP を活用予定の大学もほとんどなかったため、これも実質的には活用されませんでした(その後 JeP は廃止され、英語外部検定の導入と記述式問題については、昨年 6 月に実現困難という結論が出されました)。

試験の変更に対応するだけでも気を張らなければならないのに、今度は新型コロナウイルス感染症が全国に拡大する事態が発生。2 年の 3 月初旬から 3 年 5 月初旬までの 2 か月間、休校措置がとられました。この時期は本格的に受験シーズンをスタートさせるのに非常に重要な時期。当然痛手です(これはどの高校も同じでしょう)。それでも担任団は、生徒と意思疎通をはかろうと様々な工夫をしました。学校ホームページ、Google Form、

ラジオのアプリ等・・・機械音痴の人間からすれば、よく考えるなあ后感心させられることばかりでした。進度の遅れも、夏休みの短縮や先生方の指導の工夫でクリアしました。

修学旅行出発前の首里城の焼失、コロナによる各種行事の中止や制限、1組担任の急逝、学習以外にも様々な苦難を乗り越えて臨んだ大学入試。詳細な合格結果は進路部 HP をご覧ください。国公立大学は北海道から沖縄まで、学部も実に多様です。現役で医学部医学科に2名(男女1名ずつ)合格したことは特筆に値します。私立大学では首都圏の難関大学(早稲田、慶応、上智、東京理科、明治、青山学院、立教、中央、法政)全大学で合格者が出ました。ここ7年間で初めてのことです。

2. 2021 年度の動き

(1) 令和元年度補正 先端的教育用ソフトウェア導入実証事業

これは昨年度実施しました。同窓会報の編集期間には継続中で報告ができなかったので、あらためて振り返ります。この事業は経済産業省が主管で、EdTech ソフトウェアを学校等へ導入するための実証を行う事業者、必要な経費の一部を補助する施策です。この話を河合塾から紹介され、校長が協力する決断をしました(進路部は実務担当です)。具体的には、MyET(<https://myetjapan.com/>)という英語スピーキングトレーニングアプリでスピーキングとリスニングの力を養成し、その補完として Write&Improve(<https://writeandimprove.com/>)というライティング自学用オンライン教材を活用する。そして英語力向上の効果測定にケンブリッジ英検 4 技能 CBT リンガスキルを用い、世界標準の CEFR で評価する(<https://www.kawaijuku.ac.jp/cambridge-english/linguaskill/>)。生徒の個人負担はなく、取得したスコアは調査書や履歴書に記載可能というメリットもありました。

(2) 高校全学年で GST を実施

2019 年度から学年進行で始めた GST(Generic Skill Test)ですが、今年度で全学年がそろいました。3 年生で返された結果は、大学入試出願時に提出する志望理由書等の書類作成に役立てることができます。また、教員の振り返りにも活用できます。現在 2022 年度入試の最中ですが、進路部では GST の結果と受験結果を紐付けて分析することを計画しております。GST の詳細は進路部 HP にある 2019 年度の同窓会報をご覧ください。

(3) 附属中全学年でも GST を開始

高校で始めた GST ですが、中学生版がリリースされたので、附属中生全員にも実施しました。高校生と同じく学年毎に解説会も行い、中学 1 年生においては保護者会と合体させて、親子で個票を見ながら解説を聞いてもらいました。保護者にもこの概念を理解していただき、学校全体で共通語になることを願っております。附属中出身で高校 3 年生の保護者からは「うちの子が中学のときにやってほしかった」という声を伺いました。

(4) 進路に関するワークショップへの支援(附属中保護者対象、PTA 主催)

昨年 12 月、PTA 企画部が上記のワークショップを初めて開き、30 名ほどの保護

者が集まりました。今の大学入試のことについて話してほしいとの依頼を受け、保護者世代からの18歳人口の変化、受験費用等について講演してきました。私にとっても初めてのことであったので、内容構成の匙加減がわからず、やや盛りすぎてしまったという反省をしております。PTA 役員さんからは好評をいただき、高校保護者対象でも同様の企画を考えたいとのことでした。

3. 求められる「やってみなはれ」の精神

前記2(2)でも述べたとおり、この3年間GSTを実施してきました。このアセスメントで測定されるリテラシー・コンピテンシーは次のように説明されています。

リテラシー(知識を活用して課題を解決する力)

- 情報収集力：目的に向けて幅広い視点から確かな情報源を見定め、収集した信頼性の高い情報を適切に整理・保存する力
- 情報分析力：集めた情報を客観的かつ多角的に整理・分析して、現状を正確に把握する力
- 課題発見力：合理的・論理的に考え、課題を見つけ出す力
- 構想力：何かを行う際、様々な観点からアイデアを出し、実行計画を作成する力

コンピテンシー(経験を積むことで身についた行動特性)

- 対人基礎力
 - 親和力：仲間と信頼関係を築く力
 - 協働力：目標に向かって周囲の人と協力的に課題に取り組む力
 - 統率力：その場の状況を判断して周囲の人を動かす力
- 対自己基礎力
 - 感情制御力：自分の気持ちをコントロールする力
 - 自信創出力：自分の強み弱みを理解して、自信を持つのと併せて自分を向上させようとする力
 - 行動持続力：最後まで粘り強く責任を持って取り組む力
- 対課題基礎力
 - 課題発見力：情報を収集し、的確な情報から解決すべき課題を発見する力(行動スタイル)
 - 計画立案力：課題解決のために効果的な計画を立てる力
 - 実践力：課題解決に向けて自ら行動する力

これらのうち、リテラシーは総じて高い結果が出ていますが、コンピテンシーについては、対自己基礎力の中の感情制御力・自信創出力が相対的に低い結果となっております。学習や大学受験において、力があるのに程々のところでやめてしまう生徒を見ると、コンピテンシーを伸ばさせる機会を逸してしまってもったいないと思います。高校在籍中に、あるいは附属中の頃から身の回りにある課題の解決に貢献する行動を起こしたり、高いレベルの学び(大学が提供するプログラムへの参加等)に挑戦したり

して自信をつけてほしいものです。

4. 大学受験のマインドリセット

年齢が40代以上の同窓会員の皆様が受験生だった頃、その大半は一般選抜(1月下旬から3月にかけて行われる入試)で進学していただろうと拝察します。今は様相が変わってきました。国立大学は総合型選抜(旧AO入試)・学校推薦型選抜(旧推薦入試)の入学定員を3割まで増やす目標を掲げています。そのため、後期日程の定員が縮小傾向にあります。私立大学の入学者も総合型12.1%、学校推薦型44.4%(いずれも令和2年度)と合計56.5%にのびます。2つの選抜は3年生の9月から11月にかけて行われており(一部2月までかかるものもあります)、以前に比べて入試が前倒しになってきています。総合型選抜に資するための育成型プログラムを3年の4月から開始する大学も現れました。高2の3学期は高3の0学期、とは昔からよく言われていますが、もしかしたら「高校3年生は大学0年生」の動きが今後加速するかもしれません。

一方、一般選抜による合格が尊いものであることは不変です。それは合格した受験生本人がよくわかるはずです。ある卒業生の話をします。その生徒はいつもマスクを着用している(コロナ前です。自分の感情を隠しているように私には思えました。)おとなしい生徒でした。第1志望の国公立大学に前期日程・後期日程ともに出願。前期不合格で、気持ちが調わないうちに後期を受験して見事合格。学校に報告に来たとき、今までにない笑顔を見せてくれました。この後の人生で支えになる自信を得たことでしょう。一連の経験は、コンピテンシーの伸長におおいに生きるはず。単なる合格を追求するだけではない、人間としての資質を伸ばすための一般選抜という捉え方を私は提唱します。

5. 教学IR

現在高校で行われている施策の中には、もともと大学から始まったものがいくつかあります。例えば、生徒による授業評価。2000年頃から本格的に多くの大学で始まり、その流れが高等学校に降りてきました。また、現在すべての大学において3つのポリシー(アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー)が定められていますが、高等学校にもスクールポリシーという形で流れが来ました。すでに策定して公表している高等学校もあれば、現在策定中の高等学校もあります。次に来るトレンドは何か。私は教学IRだと予想しています。教学IRはここ2、3年で各大学が本格的に始めました。Googleで検索すると、次のような説明が出てきます;「IR(Institutional Research)とは本来、教育、経営、財務情報を含む大学内部のさまざまなデータの入手や分析と管理、戦略計画の策定、大学の教育プログラムのレビューと点検など包括的な内容を意味します。」つまり、学生の学習記録や授業評価等の各種調査を分析し、それらを基にして次の教育計画を考えるということです。一部の高校ではすでに動き始めています(関心のある方は、<https://www.ir-hs.com/>をご覧ください)。あと数年のうちに全国的な動きになるでしょう。その時、本校はGSTで対応できると考えております。